

「大沼枕山・鶴林関係資料」解説

大沼 宜規

Abstract: *The ONUMA Chinzan and Kakurin Papers* consist of 266 documents related to ONUMA Chinzan (1818–1891), a writer of Classical Chinese style poetry during the late-Edo and early-Meiji periods, and his son-in-law, Kakurin (1863–1913). This collection includes correspondence, poetry manuscripts, and other documentation related to both Chinzan and Kakurin, who succeeded to Chinzan's estate and taught classical Chinese and morality. It also contains letters from NAGAI Kafu, who wrote a biography of Chinzan called *Shitaya Sowa*, to Kakurin's son-in-law, KUSUNOKI Shozaburo. Included in this article is an annotated bibliography of the documents in the collection.

I はじめに

「大沼枕山・鶴林関係資料」は幕末・明治期の漢詩人大沼枕山（1818-1891）と、その婿養子で継嗣となった鶴林（1863-1913）に関する資料を中心とする 266 点¹ からなる資料群である。平成 27 年 7 月 10 日、枕山の玄孫、鶴林の曾孫にあたる大沼千早氏から当館に寄贈された。

寄贈の話は、枕山の蔵書印を紹介する記事² を執筆して以来大沼家と長く交流のあった当館の川本勉主査（当時）が、資料の永続的な保存について相談を受けたことが発端となった。川本主査と当時人文課（古典籍資料室担当）に属していた筆者が大沼家を訪問し、寄贈を希望される資料の内容・点数等を確認し、受入手続きをとった。殺虫処置の後、準貴重書指定³、補修作業⁴ を経て閲覧に供された。現在ではデジタル化され国立国会図書館デジタルコレクションに搭載されている⁵。なお、当館への寄贈資料とは別に書幅・書籍・稿本・詩稿など 200 点近い関係資料が大沼氏から二松学舎大学に寄託された⁶。

国立国会図書館の所蔵資料等を検索できる国立国会図書館検索・申込オンラインサービス（国立国会図書館オンライン⁷）には関係資料全体を示す書誌 1 件が搭載され、書簡等の発信者など作成者を記した細目 266 件を掲載している。しかし、およそ 8 割を占める書簡などの具体的な内容が詳細に分かる細目が望まれることから、本目録を編集

することとなった。筆者は、漢詩文を専門に学んだものではないが、目録の編集にあたったことから、目録本編に先立ち「大沼枕山・鶴林関係資料」の概要と特徴ある資料を紹介して、利用者の便をはかるものである。

Ⅱ 大沼枕山・鶴林と「大沼枕山・鶴林関係資料」

大沼枕山(厚、捨吉)は、文政元(1818)年3月19日、江戸下谷に下級の幕臣で漢詩人でもあった大沼竹溪(次右衛門)の子として生まれた⁸。10歳で父を亡くした枕山は、家を竹溪の実弟基祐が継いだことから、15歳から18歳まで尾張在住の叔父鷲津松隠に養われ、松隠の子益斎の家塾有隣舎で学んだ。同門に1歳年下で枕山のライバルといふべき森春濤がいる。天保6(1835)年、江戸に帰ると、漢詩人菊池五山の門に入り、梁川星巖の詩社玉池吟社に参加した。翌7(1836)年には早くも『広益諸家人名録』に詩人として掲載されており、若くして才能を発揮していたことが分かる。幕末期から明治期にかけて書画会などで活躍し、『房山集』(天保9(1838)年序)、『枕山詩鈔』(安政6(1859)年~慶応3(1867)年)、『江戸名勝詩』(明治11年)などの詩集を発刊した。下谷仲御徒町に下谷吟社を開いて以降、多くの門弟を得、詩集『同人集』(嘉永3(1850)年~安政2(1855)年)、『下谷吟社詩』(明治8年)などを編んだ。明治2年に枕山が書いた漢詩『東京詞』により、維新政府の糾問を受けたことはよく知られている。明治維新後、「終日手盃。繙詩集。尚友古人。看花玩月外。不復出門。(中略)猶能結髻。一見知為旧幕府逸民也⁹」と名利を求めず在野の漢詩人として生きてとされる。晩年は中風により歩行が困難となり詩社の活動も不振に陥ったといわれるが、中風により身体が不自由になったという説を否定する見解もある¹⁰。明治24年10月1日に没した。享年74歳であった。

国文学者日野龍夫氏は「漢詩は、明治中期をもって、時代の生き生きとした人間精神を盛り込む具としての役割を終了した」と論じたうえで、枕山のことを「漢詩が時代に対して有効でありえた最後の時期の漢詩人の、代表的存在」と評価した¹¹。同じく国文学者尾形侑氏も「文学史の上で空白の時代ともいふべき幕末から明治十年代にかけての低迷・混乱期に、唯一、文学の高みを支え、近代文学誕生の基盤を培ったのは漢詩である」とし、「その隆盛期漢詩壇の第一人者と仰がれたのが、下谷吟社主宰の大沼枕山である」と位置付けた¹²。枕山は日本漢詩史を代表する詩人の一人といえる。

鶴林(善次郎)は文久3(1863)年8月生。明石出身。西川氏の出。枕山の娘嘉年(芳樹。1861-1934)と結婚し大沼家を嗣いだ。沢田姓を名乗った時期もある由である¹³。『大沼善次郎履歴書』¹⁴によれば、明治12年から同14年まで大阪の私塾泊園書院で藤沢南岳

の門人となり、同 15 年 2 月から翌年 12 月まで兵庫県の小野中学校で漢学の教員を勤めた後、同 17 年（16 年と後に訂正されている）4 月に枕山の門人となった。同 22 年から翌年まで大阪で藤沢南岳らとともに振鐸會を起こして「儒教講談」を行い、同 23 年 10 月に枕山の養子となった。翌月から同 24 年 12 月まで中山法華経寺壇林の漢学教師、同 25 年 9 月から同 32 年 6 月 9 日まで海軍予備校の漢学講師主任を務めたという¹⁵。同 32 年以降、順天中学校で漢文・道徳の教師となり、同 33 年頃には自ら大沼義塾を創設するなど教育活動に携わった¹⁶。編著書には『詩学明弁』（明治 29 年）、『漢学知要』（明治 30 年）、『論語読本』（明治 30 年）、『漢文異采』（正統。明治 32 年）がある。大正 2 年 1 月 28 日に没した。享年 51 歳であった。

鶴林に関する研究は、二松学舎大学に寄託された資料を検討した合山林太郎氏のもののみであろう¹⁷。合山氏は「明治三〇年代初頭において、鶴林は、漢詩人としても、一定の評価を得ていた」とし、また「国家への信頼とその発展の希求」を重視していたこと、「とくに中年以降、鶴林は、青年層の精神が荒廃していると感じ」ていた人物であることを指摘している。また、鶴林には以下の人物評が伝わっている。

一代の詩人枕山大沼氏の嗣なり。漢籍に通じ漢詩を善す。麦飯綿服意に介せず。況して富貴功名をや。余往時史記の講義を聴く。人を論じ時を論じ世を論じて王侯無し。千古の書を読み天下の士を友とすとは則足下の謂ひ也¹⁸。

「麦飯綿服意に介せず。況して富貴功名をや」という言葉からは世におもねらない人物像が想像されよう。

「大沼枕山・鶴林関係資料」は、書簡等 226 通、草稿等 28 枚 3 冊 1 綴、人名録 3 冊、出納簿 1 冊、引札 1 枚、そのほか 3 枚からなる。ただし、点数は若干注意が必要である。資料を整理・登録した段階では、266 点のうち、書簡・詩稿・画稿など 202 通（枚）は巻紙状の台紙 53 紙に貼付されていた。巻紙への貼付は大沼千早氏によれば、氏の祖父（鶴林の娘婿）にあたる楠莊三郎によるとのことであり、その貼付順序を目録に活かしたが、糊がはがれた継紙や連続すると思われる詩箋の前後半が異なる巻紙や異なる部分に貼付されていたため別資料として扱ったもの、日付に齟齬があるものの書簡とほぼ隙間なく封筒を貼付してあったことから付属資料扱いとしたものなどもあり、点数は便宜上の数にすぎないことを付記する¹⁹。

Ⅲ 枕山関係の資料

「大沼枕山・鶴林関係資料」には枕山宛の書簡、枕山自身の書簡（案文など）、枕山の書跡など、およそ 130 点が残されている。幕末期から明治期までのものが見られるが、

一部を除き作成年代を特定できないものが多い。差出人は門人と思われるものが多い。

師菊池五山からの書簡は1通だけ残されている。枕山の兄弟子にあたる梅痴を通じて「歳晩御祝詞」として金1円を贈られた礼状である〈115〉(以下、「大沼枕山・鶴林関係資料」の請求記号枝番をくゝに入れて示す)。梅痴の書簡もあり、五山の「観蓮の儀」における負担額、五山の子息を介して書籍を讃岐に遣わしたいこと、添削のため預かった詩を紛失したので枕山宛に送られている草稿を送付してもらいたいこと、自身の詩について批評・添削を依頼することなどが記されている〈88〉。玉池吟社の関係者では、鈴木(鱸)松塘から娘采蘭の初七日を知らせるものも残されている〈27〉。松塘の母が、予定を過ぎても帰郷しない松塘を心配し、枕山に様子を問う書簡が印象的である〈127〉。

門人の書簡には、植村蘆洲、江幡晚香、嵩古香、木内芳軒、小島韶斎、小島慎斎、金洞(智仙)、杉浦梅潭、関雪江、田口柳所、中根半嶺、新田断常、逸見魯斎、牧野再龍、溝口桂巖などのほか、松平慶永など枕山の指導を受けた大名に関わるものもある。

枕山関係の資料は昭和63年に刊行された『大沼枕山来簡集』²⁰にほとんどが翻刻されており、すでに所載の資料に基づく研究もあるので、ここでは「大沼枕山・鶴林関係資料」²¹にみえる枕山の活動に即して内容の一部、とくに名の通った人物のものや枕山の人物像が窺える興味深いものを中心に、簡単に紹介する。

詩文の添削 前出の梅痴の書簡にもあるように、詩文の添削依頼を含むものが多数ある。たとえば、高弟杉浦梅潭は「晩翠詩巻及金式円差上申候、御落手可被下候、来ル三十一日ニ受取之もの差上候間、夫迄御刪正を乞候也」と記している〈97〉。『晩翠詩巻』と金2円を贈り、詩の添削を請うたことが分かる。同様に嵩古香、堀口藍園、小島韶斎、中村城山など、およそ40通に添削を依頼する内容がみえる。「以後御点削御送付可被下ト日夜東天ヲ望待居り候、何卒十二分御朱筆之上、早々御送達被下候様奉希望候」と丁寧な言葉で懇請するもの(中川泰算〈129〉)や「先比御正し被下候内、一首分り兼候処有之、別紙差上候、何卒御教示奉希候」と、書面の添削で理解しきれない部分について再度質問をするものもある(江幡晚香〈10〉)。差出人は不明だが、次のような書簡も残されている〈75〉。

入用ノ詩文も有之申候処、元来御存知之通、不学□聞之男にて此事ニ至り実ニ当惑及申候、依之、以来先生余ガガクヤヲ御取持可被下候、偏ニ奉願上候、尤も題・跋も古人ノ体ヲ見、又ハ近人之所為ヲヨク見、其句ヲ取カヘタリナド致シタラ、少しハ宜シカルヘキヲ、多忙ニ付不為之、只出ホウタイ、デタラマヘト申物ナリ、定テ先生笑之、併シ余一人ニテハ、兎テモ助字・転倒・借置ナト不及ナリ、故ニ如此何率^(マ)以朱字委御印可被下候、右ノ御筆削之上、人ニ見せ可申候、度々乍御面倒如此致し御点削乞候ハハ、自然と十字廿字位ノ物ハ出来可申哉、但し小生思ニハ、

御筆削之物ハ其時ノ趣ニヨリ少々ハ古人ノ語入カヘ用候ハハ、大ニ誤ハ有之間敷哉、佳作ハ入ぬ事也。小生相応ナ所ニテヨロシ（※□は判読不能の文字。目録の凡例を参照 [p.44]）

詩文を必要とすることが生じたが不学の自分では当惑するばかりであり、題跋も先人のものをもとに言葉をとりかえればよいと思うのだが、余裕がなく発想のままに記したので、添削をお願いしたいという。「余ガカクヤヲ御取持^(案)」という文言からは、もはやゴーストライターに近いものを連想させる。あまり上手な文章に整えすぎることなく自分相応のものにしてほしいという注文までついている。枕山は様々な添削の要望に応じていた。

書物の出版 秋葉格非の書簡〈120〉には「同人集之後篇江詩集め、急々相届可申処、是又延引申訳無之、もし間二合候ハハ、（中略）御穿鑿之上、加入奉願上候」とある。下谷吟社同人の詩集『同人集』の「後編」刊行にあたり、自らの詩も地域のとりまとめも遅れたが、間に合えば検討のうえ詩集へ加えて欲しいと訴えている²²。また、枕山は門人が書物を刊行する際にも、世話をしていた。植村蘆洲は「御蔭ヲ以詩者無恙刻リ上リ候」〈116〉と記している。「板下貴論之通り銀式分位之处ニテ可然歟」「書手御任セ申上候間、宜敷被仰付被下度奉願上候」「右板下認之料并刻ニカ、リ刻料追々可奉啓上、贈り方前以被仰越被下度、何卒御迷惑ニ不相成候様仕度、小子方是以囊中ヨリ直ニ差上奉り候儀ニモ無御座候間、程合御示教奉願候」と板下（版下のこと）の費用や筆耕の人選などを相談するものもある（岩下桜園〈17〉）。なかには、「家詩上木ニ付入用之金子、弥借用ニ相成間（中略）此証文江御調印被成下度奉希候」（竹内楊園〈19〉）と出版に必要な借金のため書類への捺印を請う書簡も残されている。

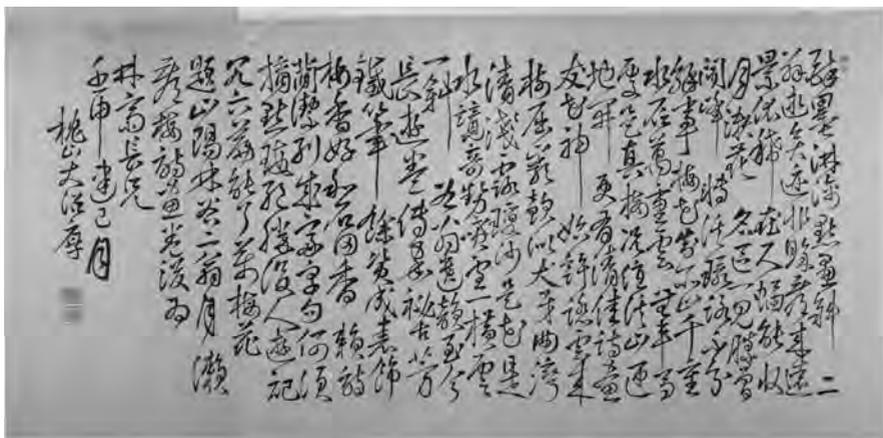
詩文の作成依頼 上述の竹内は、書簡後半で「嚶鳴集江御題詩之事、図方八人ニ而盛宴之図合作出来、刻家へ廻候間、御題詩半丁ニ入れ候様、御急製奉希候」と記している。『嚶鳴集』に掲載する図は出来たので、あわせて掲載する半丁分の題詩作成を急ぐよう願った²³。このように詩文などを依頼する書簡も少なくない。たとえば江幡晩香は「兼而作置候田園之拙作一百首今般上粹致し候間、右序文也題辞之詩なり御作被下度奉願候、巻卷之面目を起し候事ニ御坐候間、何分御恵賜被成下度」〈10〉と著作の刊行にあたり、序文あるいは題辞の作成を依頼している。

揮毫の依頼 題辞などの作成依頼が多いのは枕山の書が評価されていたことも関わるだろう（次頁写真〈203〉）。枕山は明治14年に開催された第二回内国勸業博覧会で、書家として著名な日下部鳴鶴や長三洲らとともに入選しているほどであった²⁴。そのため揮毫の依頼も多数見だせる。なかでも次の書簡は枕山の書の人気を示すものであろう（渡辺平作〈15〉）。

壁谷貞ナル者、新居落成、随分結構ナレ共、貞云、枕山先生之玉作ヲ展セサレハ壯観不足、豈結構ト云ン耶、然レ共謝儀ニ方ントスル者僅ニ金壹円耳。因テ未能得之、云々。其求之深切ナルニ感シ、貞ニ換ツテ其欲スル処ヲ乞フ。即彼之金壹円ハ輕微ナレ共、志ハ即厚シ、速ニ御検入、且御揮毫有之度候、并ニ小生へも御近作御恵投奉念望候、

壁谷貞は新築の家に枕山の書を望んだのだが、揮毫料が1円しか払えない。それでも枕山の書を飾らなければせっかくの新居の壯観が不足するという。そこで、枕山と旧知の渡辺がその1円を送って、枕山に揮毫を掛け合ったのであった。併せて渡辺自身も御近作をとねだっている。壁谷が本当に1円しか払うことが出来なかったか否かはともかく、枕山の書が尊ばれている様子が伝わる。

川部亮という人物も「拙作御添削・御揮毫難有奉拝謝候、余り貪之様恐入候得共、扇子壹本願置候分、後刻頂戴人差上候間、御渡奉願候」と記している。「余り貪之様」と恐縮してみせながらも、立て続けに揮毫を依頼した扇子も受け取りたいというのである(44)。



写真「題山陽林谷二翁月瀬観梅詩画卷後為林齋長兄」(203)

謝礼 謝礼は枕山の経済的基盤となった。「御年玉之驗迄金百疋呈上之仕候」(白田哲弥太 <43>)、「金壹円歳暮として差上候へは、御笑納被下度候也」(堀口藍園 <14>) など季節ごとの謝礼のほか、「去年来方之愚作不殘認上候ハハ、何卒御改刪叱正之段、偏ニ奉願上候、何も文房中ニ無之、有合之風呂敷一片・金式百疋聊以進呈、何卒御受留可被

下候」(牧野再龍 <105>) や「御潤筆三百疋呈上候、御叱留可被下候」(木内芳軒 <6>) と添削料、潤筆料を贈る記事もみられる。江幡晩香は先ほど示した序文・題詩の作成依頼に続けて「右御出来被下候上ハ、御礼之義ハ厚ク奉謝度奉存候」<10> と記している。**督促** 多くの添削や揮毫に応えなければならない枕山は、依頼に対して時間がかかることもあったらしい。「拙者社中跡部村茂原周助方去六月十四日出二而白田嚶々吟社之集差上候処、若途中差支二候歟今日迄御報不下置趣、茂原生心配仕り相談ニ拙者方迄参り候間、右御問合申上候、万一御多事之御中故御刪正相済候はずバ、寛二而も御点削御返し奉願上候」(依田稼堂 <141>)、「安田氏歎象図題詞御出来候ハ、小子へ御一声願上候、同氏ヨリ何与なく促来候ニ付、宜様願上候」(浜村大澗 <130>) と遠慮がちに問い合わせる記事もみえる。余程待ちかねたのか「昨年小絹御揮毫御願申上候、彼絹ハ少シ入用ニテ同様ナルヲ諸先生へ相願候事故、老先生ニハ御揮毫御六ヶ敷候へハ、何卒御返却被成下度、此段万々願上候」と記し、難しいようなら小絹をお返し願いたいとする書簡も残されている(脇坂廬存 <55>)。

詩人との交流 ほかに詩人同士の交流が分かるものとしては、たとえば、「明十二日午後四時半、枕橋八百松楼二而鎌田醉石・杉浦梅譚其外諸先生小集、相催申候ニ付、若御散策之御序御立寄被下候ハ、難有奉存候」と、詩会へ招待するもの(信正 <106>)、「(前欠) 坂之文林も大寂寥、百峰・海屋相続て雲如皆下世、心細く相覚候上、一昨日又旭荘之詠を聞申候」(河野鉄兜 <77>) と大阪の文壇の状況について知らせるもの、梁川星巖の三十三回忌の報告とともに、出詠を願うものなども見られる(金森吉次郎 <60>)。

大名家とのやりとり 古河藩主土井家の家臣からの「兼而河口倫二方御内願申置候通、当分之内拾五人扶持御贈、客卿之振合二而、古河表江隔月位二御出御坐候様、御願申候」と枕山を招聘する内容 <80> や津山藩世子松平明丸(康民)の家臣からの明丸が風邪を引き連絡ができずにいたが近々参堂するという内容 <57> がみえる²⁵。幕末の福井藩主松平慶永の晩年の書簡には、セイロンから僧侶「ダンナマンダ」が来訪し、慶永邸を訪問した際の様子²⁵が細かく記されている <2>。

去ル八日、住職积雪照印度僧を召連拙宅ヲ訪問候故珍敷事、早速面会候、右雪照印度僧、外ニ通弁一人参り申候、印度語ハ日本ニ無之候故、英語ナレハ少々分り申候、依之通弁も英語を心得居申候、(中略) 錫蘭^(セイロン)ハ寒暖計百以上之度四季皆同し、雪照云ふ、誠ニ日本ノ寒気ニハ困難のよし、依之旅寓中にハワタ入ヲ三ツほど衣せ居候へ共他出之節ハ印度法之通りヲ用ひ申候、木綿之衣一枚けさ一枚之由、ダンナマンダについて詳細に記す様子からは、慶永と枕山が懸隔のない間柄であった

ことが想像される。

「大沼枕山・鶴林関係資料」中の枕山関係の資料は、下谷吟社や枕山の活動を示すものがほとんどである。枕山が幕末・明治期を代表する漢詩人であることを考えれば、枕山のみならず幕末・明治期の漢詩人たちの活動を知るうえで貴重な資料となるだろう。

IV 鶴林関係の資料

「大沼枕山・鶴林関係資料」中には鶴林宛の書簡、筆跡、鶴林の妻女嘉年宛の書簡など鶴林・嘉年に関係する資料は、数え方にもよるが、およそ80点残されている。これらのほとんどは『大沼枕山来簡集』には収められていない。鶴林関係の資料は、枕山関係のものと異なり、年代が分かるものが多いことから、資料をもとに彼の生涯を紹介していくかたちで内容を紹介していきたい。

枕山の死 鶴林関係の資料の前に、枕山の死に関する資料について紹介しておく。枕山は明治24年10月1日に没した。このことに関する資料としては、枕山の死亡報知の記録『報知簿』〈259〉がある。91人の住所・氏名を掲載する。植村蘆洲、小野湖山、岡本黄石、向山黄邨、鈴木松塘、富古香など漢詩人のほか、松平康民、勝海舟、細川潤次郎などの旧大名や頭官、中井敬所（篆刻家）、奥原晴湖（画家）などの名前もみえ、枕山の多彩な交友関係が窺える。このほか、小野湖山〈91〉、田口柳所〈163〉、塩田廉斎〈201〉の追悼詩、逸見魯斎が嘉年に送った悔み状〈93〉が残されている。同年12月付けで旧古賀藩主土井利与の家扶が嘉年に送った書簡〈161〉には、歳暮なので「旧先生御存世中御世話」に対し3000疋、「度々御上ケ物」に対し1000疋を贈るとある。だが、これは枕山が亡くなったその年限りのことであった。

枕山の顕彰 枕山亡き後の大沼家で、はじめ活動の中心となったのは、芳樹の号を持つ女流詩人嘉年であつたらしく²⁶、嘉年宛ての明治20年代後半の書簡が若干残されている²⁷。『枕山先生遺稿』（明治26年）も嘉年名義で発行された。同書の出版費用をまとめた『枕山先生遺稿刻費諸雑費簿』〈261〉によれば、総額では30円52銭5分をかけている。当時小学校教員の初任給が5円程度の時代であるから相当な出費であるが、枕山の活動を継承していくうえで、その顕彰は不可欠であつたらう²⁸。

鶴林も枕山の事績の確認につとめていた。前述のとおり鶴林には『詩学明弁』の著作があるが、「大沼枕山・鶴林関係資料」中にある枕山門人が鶴林に宛てた金洞の書簡〈165〉には、枕山による「金洞詠物詩鈔序」（明治24年）とともに「御申越の枕山詩話或ハ閑話等名目のみにて未々実地を不認ノ間、愚老手許ニ有之候序文のみ写し差上候、外ニ是ぞと申逸事も無之候也」と記されている。枕山存生中に出版計画が頓挫した「枕山閑話」

や枕山の逸事について鶴林が尋ねた返信であろう。

明治34年以降のことであるが、鶴林は『枕山先生門人帳』〈260〉を作成している²⁹。別に枕山時代から用いていると思われる『[住所録]』〈258〉もあり、没後10年以上を経て、交流の続く旧門人を書きあげ整理するなどの必要があって作成されたものであろう。実際に、明治36年に信州の門人藤沢桐之助が嘉年に贈った書簡には十三回忌を開催したことと、記念に枕山の肖像送付を願うことが記されている〈229〉。

宮中顧問官などを勤めた榎取素彦から明治41年に届いた年賀状には「貴作ヲモ被相示、枕翁後嗣ノ名ニ不愧事ト感吟申候也」とある〈242〉。また、同年10月19日、徳川慶喜が東征軍に対し江戸攻撃の中止を求めた書状の写しを鶴林が家中で発見した際には「上野輪王寺宮様、越前春嶽公ヨリ先師大沼枕山ニ内覧諮詢せしめられしもの也」「大沼鶴林秘蔵」と覚を添えている〈1〉。慶喜と近かったとされる枕山であるだけに³⁰、大沼家では慶喜からの諮詢があったと伝わっていたのであろう。鶴林は生涯、枕山の後継者であることを意識して生きたといえよう。

鶴林独自の活動 鶴林は、枕山の後継者として大沼家を守るということのみではなく、海軍予備学校や順天中学校で漢文や道徳の教育活動に従事し、自ら大沼義塾を開くなどしていた。そのような活動のうち、「大沼枕山・鶴林関係資料」に若干の資料が見いだせるのは帝国青年会の活動である。同会は、明治32年4月に設立され、「基督教徒の青年革新会に対して、仏教及び国家主義を持する帝国大学、高等学校、高等商業学校、尋常中学、工業学校、哲学館、并に五大法律学校の青年相謀り、帝国青年会なるものを設けたる³¹」と紹介されるが、長く続いたものではないらしく、詳細は未詳である。

会長には第二次・第四次伊藤博文内閣で大蔵大臣を務めた渡辺国武が、幹事長には副島種臣の子である副島道正がつき、鶴林は幹事となった。「大沼枕山・鶴林関係資料」の中には宛所に「帝国青年会幹事大沼鶴林君」とある渡辺の書簡〈179〉のほか、次の副島の書簡もある〈149〉。

来廿五日錦輝館ニ於テ相催スベキ演説会ニハ出席弁士ノ数殊ノ外少ナク一同閉口致シ居リ候間、(中略)明日老父ノ名刺御持参湯本武比古氏ヲ御訪問ノ上、同氏へ仁兄ヨリ御依頼被下間敷候ヤ、(中略)何卒仁兄御芳足被下度奉願上候、尚ホ片淵氏ニモ三浦子杉浦氏等ヲ訪問致ス様依頼致シ置候、(中略)尚ホ為青年会何卒宜敷御尽力被下度奉希ヒ候也、

演説会の弁士が少ないため、明日副島種臣の名刺を持って湯本武比古(東京高等師範学校教授などを勤めた人物)に依頼をしてほしいという内容である。文中に片淵氏とあるのは副島種臣の門下生で帝国青年会の活動に関与していた片淵琢のこと。片淵から鶴林への書簡も1通ある〈220〉。

原稿、採集ニ非常ニ困難、多忙ニ苦み居候次第ニ御坐候間、是非共大兄ニも折々御出稿御助力被下度候へども、文宛欄ハ君之一任ニ相頼申度儀ニ御座候故、甚ダ相済み不申候得共、此処一奮発ヲ相煩シ充分之御責任ヲ以テ可然御取斗御処理被下間敷哉、

鶴林が片淵とともに帝国青年会を支えていたことが分かる。同会には鶴林のもう一人の師藤沢南岳（1842-1920）も、鶴林の勧誘により加わっている。南岳は「今般青年会ニ加盟之事承知仕候、乍然、文章等之輔佐ハ可致候へ共、金銭ハ貧生之任ニ非候間、御断申上候」と、参加を承諾して文章の相談には乗るが金銭面の協力はできないと記した〈184〉。その2か月後にも「青年之方嚮ヲ失フ多キ」を嘆いていたが「此会幸ニ救之、大ニ可喜之至」であるので員外で尽力する旨を告げている〈190〉。

鶴林自身も独自の人脉を保ち、活動の幅を広げていた。大沼義塾の翼賛員となった東久世通禧、秋月種樹、海江田信義、藤沢南岳、小野湖山³²の書簡も「大沼枕山・鶴林関係資料」中にはみえる。

鶴林一家の生活 だが、鶴林自身の就職は必ずしも思い通りにはならなかったらしい。鶴林の就職斡旋の依頼を謝絶する書簡が3通ある（島田重礼・明治24年6月〈177〉、坪内雄蔵・同30年3月〈180〉、棚橋一郎・同32年9月〈221〉）。さらに、事情ははっきりしないが、棚橋の書簡の3か月後（明治33年1月14日）、品川弥二郎は鶴林に次のように記している〈181〉。

片淵之事ハ行レヌカ残念ニ候、何か其中よき事もアルベシ、今年ハ「相替ツテ」少しく福人仲間ニ入られん事ヲ神かけて祈り居候、尊攘堂之神ニも在世中ハイヅレも貧乏性之御方々ニテ今日祈願シても中々御聞濟ノナキニハ閉口、御一笑可被下候、

品川が尊攘堂に霊を祀る勤王志士も生前は貧乏であったから祈願しても効果がないと冗談めかしてはいるものの、鶴林の活動はうまくいっていなかったことが窺える。このことは大沼家の家計にも影響を与えたであろう。鶴林の次女甲子が義兄楠莊三郎に宛てたと思われる書簡が残されている〈195〉。

一日家事やあねの裁縫の手伝へをして苦たびれた身体を十一時まで毎夜机に向ひます。あらゆる苦を一切わすれて勉強いたします。其の間が私のためには極楽でせう。（中略）ただただ学識の少しヅゝでも進むのが何よりのたのしみと思つて居ります。ただ残念なのは学費のない事です。一冊の本さへ百に一度も買ふ事か出来ません。

別の書簡でも甲子は莊三郎に「何とぞ私に勉強いたす丈の力を御借し下さいまし。只今では学ぶ秀でると云ふ事だけが私の命です」と記す〈196〉。甲子の向学心とともに、

学費の苦勞が伝わる。

鶴林と同世代の漢詩人森槐南（春濤の子。1863-1911）が伊藤博文の側近として生きたことを考えれば、世におもねらない鶴林の生き方が恵まれない境遇につながったことは否めないが、それ以上に漢詩・漢文が衰退期にさしかかっていたことは不幸なことであつたろう。前述の島田の書簡には「此節ハ何分需用ノ場所ニ乏シク是ニハ困却仕候」〈177〉と、坪内の書簡には「漢文学の科は従来之講師の時間さへ餘り候やの爲体」〈180〉とある。さらに、秋月種樹は鶴林から『漢学知要』を贈られた礼状で、次のように記している〈222〉。

漢学知要一冊御恵投被下難有候、漢文ハ近日甚不景氣ニ相成候、必竟知漢文者無之故、自然滅亡ト存候、

明治20年代から大正初年にかけて活動した鶴林は、明治20年代以降、漢詩・漢文が衰退する³³影響を直接に受けざるを得なかった人物であり、「大沼枕山・鶴林関係資料」からもその一端を見いだすことができる。

V おわりに

本稿では「大沼枕山・鶴林関係資料」から特徴のある資料を紹介してきた。幕末から明治にかけての漢詩隆盛期の枕山、それが衰退する明治後半に枕山の後継者として生きを求められた鶴林の活動を知ることができる資料群であり、幕末・明治期における漢詩・漢文の文芸世界の消長を窺わせるものといえることができる。

最後に鶴林の娘婿楠莊三郎に触れておきたい。枕山の遠縁にあたり、枕山を敬愛して『下谷叢話』を著した永井荷風は、嘉年に依頼して大沼家の資料を閲したことを『下谷叢話』中に記している³⁴。資料の繙閲にあたり荷風に対応したのは、莊三郎であつたらしく、莊三郎宛の荷風書簡も6通残されている。たとえば、大正13年のものには次のように記されている〈254〉。

枕山先生事蹟ハこの正月より少々書初め女性と申す雑誌へ掲載仕居候、別封にて同雑誌御送申上候、何分文章拙劣にて且考証も甚蕪雜にて却て先哲の名を辱むるやうの事なきやとそれのみ気かけ居候、誤謬の点何卒御示教にあづかり度御願申上候、浅草伝法院へは近日訪問致度存候、(中略) 去年拜借致候御蔵書並古文書類今少々拝借いたし度御願申上候、

このように莊三郎は荷風の調査を手伝っていたが、それにとどまらず自らも大沼家のことを調べていた。彼が多くの資料を貼付した巻紙状の台紙には、しばしば彼自身の筆跡で筆者の名前が朱書され、さらに付箋が付されている。たとえば、差出・宛所不明の

鷺津家と大沼枕山のことについて記した書簡〈176〉には、以下の覚が記された付箋がある。

此ノ貞助ト申ス人ハ尊著ニ依レバ、毅堂先生ノ父ニ当リ（中略）、三人ノ兄ノ内仲ハ女子ナレバ本手簡ノ当人尼様カトモ被考者ニ候、既ニ其当時八十一歳ノ高齡ノ方ナレバ其人トモ考ヘラレズ、枕山先生ト從姉トアリ、此父存生ノ時十五六才トアリ、此父トハ竹溪先生ヲ指スカト被存、典ノ兄弟ノ内或ハ貞助ト申セシ人無カリシ乎、疑問ニ付先生ノ御高説拜聴致度候（楠生）

質問の相手は荷風と考えてもおかしくはないだろう。「大沼枕山・鶴林関係資料」が今に伝わる背景に、先祖の活動を残し伝えようとした荘三郎のような人物があったことも記憶にとどめておきたいもの、と思う。

（補記）本稿脱稿直前の令和元年10月6日に大沼千早氏が逝去されました。同姓である私が受入れ担当となったことを喜んでいただき、本目録の刊行を心待ちにしておられるとお聞きしていただけに、ご覧に入れられなかったことは痛恨事でした。大沼千早氏の御冥福をお祈りし、本目録を墓前に捧げたいと思います。

（おおぬま よしき 利用者サービス部サービス運営課）

註

- 1 点数については注意が必要。後述する。
- 2 川本勉「国立国会図書館所蔵本 蔵書印 その289 大沼枕山」『国立国会図書館月報』462号,1999.9.p.1.
https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_1078652_po_NDLM_462.pdf?contentNo=1
- 3 平成29年2月15日に開催された第52回貴重書等指定委員会で指定された。「第52回貴重書等指定委員会報告 新たな貴重書のご紹介」『国立国会図書館月報』675/676号,2017.7/8.p.7. 参照。
https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_10369400_po_geppo1707.pdf?contentNo=1
- 4 修復作業の内容については、本誌に掲載された佐々木紫乃「準貴重書「大沼枕山・鶴林関係資料」の保存修復処置について～形態の変更を中心に～」『参考書誌研究』80号,2020.3.pp.17-24. 参照。
- 5 令和2年3月公開。ただし、著作権の保護期間満了を確認できずインターネットに公開できないものが4割程度ある。
- 6 「はじめに」（二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の「知」の形成と漢学」編・刊『企画展 大沼枕山・鶴林と永井荷風』『下谷叢話』2019.p.3. 参照。
<https://www.nishogakusha-kanbun.net/srf/2019/pdf/shitayasouwa.pdf>

- 7 URL : <https://ndlonline.ndl.go.jp/>。なお、本目録作成にあたり、修正した部分がある。
- 8 大沼枕山の主な伝記資料としては、信夫怨軒「大沼枕山伝」『怨軒遺稿』上, 信夫淳平, 1918. や永井荷風「下谷叢話」永井壯吉『荷風全集』, 岩波書店, 1993. のほか、森銚三「大沼枕山のこゝろ」中村幸彦 [ほか] 編『森銚三著作集』続編第2巻, 中央公論社, 1992.、日野龍夫「解説」日野龍夫 [ほか] 編纂『江戸詩人選集』第10巻「成島柳北・大沼枕山」岩波書店, 1990. 安田吉人「明治期の大沼枕山」『地方史研究』41巻6号, 1991.12. 同「漢詩人大沼枕山の生涯」『調布日本文化』5, 1995. 内田賢治編著『大沼枕山逸事集成』大平書屋, 2014. 徳田武「大沼枕山伝補遺一『下谷叢話』補遺一」『明治大学教養論集』449, 2014. 安田吉人「大沼枕山と多摩の豪農との交流」町田市立自由民権資料館編『民権家の創作と精神世界』町田市教育委員会, 2018. などがある。
- 9 同上信夫怨軒「大沼枕山伝」8丁表。
- 10 前掲註(8)安田吉人「明治期の大沼枕山」。
- 11 前掲註(8)日野龍夫「解説」p.310.
- 12 尾形仿「序に代えて」尾形仿「漢詩人たちの手紙—大沼枕山と嵩古香」ゆまに書房, 1994, p.1.
- 13 合山林太郎「枕山の志を継ぐ者たち—大沼鶴林・嘉年と楠莊三郎—」(前掲註(6)『企画展 大沼枕山・鶴林と永井荷風』『下谷叢話』) p.32.
- 14 『大沼善次郎履歴書』(前掲註(6)『企画展 大沼枕山・鶴林と永井荷風』『下谷叢話』) p.15 に掲載された写真による。明治32年までの記事が掲載されているが、伝記資料として取り扱う場合注意が必要とされる。
- 15 「大沼枕山・鶴林関係資料」中にも西村茂樹による明治30年の書簡〈164〉に「久々海軍子弟之教育ニ御従事之由」とある。また、『漢学知要』初版, 金刺源次, 1897. に「海軍予備校漢学教頭」とある。
- 16 順天中学校・大沼義塾については、前掲註(6)『企画展 大沼枕山・鶴林と永井荷風』『下谷叢話』pp.21-22. の解説による。「大沼枕山・鶴林関係資料」にも順天中学校を住所として送付された鶴林宛の橋本海閑書簡〈24〉があるほか、『枕山先生門人帳』〈260〉は明治34年の順天中学校の履歴書の裏面が使用されている。大沼義塾についても、宮本小一の葉書〈235〉、吉田庫蔵の書簡〈214〉の宛所に「大沼義塾ニテ」「大沼義塾塾主」といった記載がみえる。
- 17 合山林太郎「枕山の志を継ぐ者たち—大沼鶴林・嘉年と楠莊三郎—」(前掲註(6)『企画展 大沼枕山・鶴林と永井荷風』『下谷叢話』)。
- 18 湯朝観明『百字文百人評』如山堂, 1905, p.21.
- 19 長い巻紙に複数の資料が貼付されていたものと、幅の短い巻紙に一点のみ貼付される形で保存されていたものがあつたが、大沼千早氏によれば、福生市郷土資料室で1988年に展示会「漢詩人大沼枕山の世界—十九世紀後半の江戸詩壇」を開催した際に長い巻紙状の台紙を切断したためであるとのことであつた。
- 20 福生市郷土資料室編『大沼枕山来簡集』福生市教育委員会, 1988年。同書は前掲註(12)尾形仿『漢詩人たちの手紙—大沼枕山と嵩古香』に再録され、補注が付されている。
- 21 前掲註(8)安田吉人「明治期の大沼枕山」. 同「漢詩人大沼枕山の生涯」. 本稿で紹介する書物の出版や潤筆料、揮毫料などについても整理されており、参考とした。
- 22 秋葉の詩は、『同人集』2編下20丁裏から21丁表にかけて、また同3編上14丁裏に掲載されている。
- 23 枕山は『嚶鳴集』第2集で序文を、第7集で題言を、第9集で序文を記しているが、半丁で題詩を記したものは見当たらない。

- 24 春名好重『日本書道新史』淡交社,2001,p.246.
- 25 ほかに、明治21年、弟齋義が別家する連絡の葉書もある〈128〉。
- 26 前掲註(8)安田吉人「漢詩人大沼枕山の生涯」によれば、明治28年に大沼鶴林は「枕山養子相続人」を名乗るといふ。
- 27 著名な人物では、南摩綱紀(明治28年)〈204〉、中根半嶺(明治27年・明治29年)〈226・224〉、島地黙雷(明治29年)〈227〉のものがある。
- 28 森永卓郎監修、甲賀忠一・制作部委員会編『物価の文化史事典—明治・大正・昭和・平成』展望社,2008,p.398.
- 29 「順天中学試験用紙」に記された同年6月の試験答案の紙背を用いていることからそれ以降の作成と分かる。
- 30 前掲註(8)永井荷風『下谷叢話』には、「枕山は前將軍徳川慶喜の上野寛永寺に幽居せられた時、手簡を賜り旧幕臣の順逆を誤り王師に抗することのないように徳川氏のために奔走せよとの内命を受けた」と枕山遺族から聞いたとある。また、前掲註(8)信夫怨軒「大沼枕山伝」にも「先生訪勝海舟。大論時事。慷慨激昂。莫所忌憚。幕府支封徳川公聞之。召作詩。称旨。手賜葵章外套」とある。
- 31 「帝国青年会」『禅宗』50,1899.5.
- 32 「大沼義塾趣意書」(前掲註(6))『企画展 大沼枕山・鶴林と永井荷風『下谷叢話』』p.22.所載)の写真及び合山林太郎氏解説による。
- 33 たとえば、合山林太郎氏は、「明治二〇年代後半以降、俳句や和歌が革新され、また、新体詩も雅語を取り込み、より成熟したかたちへと脱皮してゆくなかで、漢詩は、抜きがたい擬古性を持つ文芸とみなされるようになる」、「社会的に大きな勢力を持ったメジャーな文芸から、少数の愛好者たちによって支えられるマイナーな文芸へと、漢詩の位置づけは変わってゆくのである」と記す(合山林太郎『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』和泉書院,2014,p.6.)。また、前掲註(8)安田吉人「漢詩人大沼枕山の生涯」も枕山の実子新吉(湖雲)の「放蕩」の理由を「漢詩文学の衰退という不安」に求めている。
- 34 前掲註(8)永井荷風『下谷叢話』pp.104-106.に梅痴書簡〈88〉が翻刻されている。

※本稿で取り上げたサイトの最終アクセス日は令和2年2月6日である。